

Ⅱ 若年者の自立に関する調査

1 若年者の自立に関する調査（一般市民調査）

1) 調査概要

【調査対象及び回収の状況】

調査対象者 2,000名（町田市内在住の20歳から64歳の市民の中から無作為抽出）

回収件数 820件（有効回答件数 813件、有効回収率 40.7%）

【調査方法】 郵送による配付、回収

【調査期間】 2012年9月14日～9月30日

2) 調査結果の見方

- ① 設問の回答者数はNで表示している。
- ② 集計は、小数第2位を四捨五入しているため、数値の合計が100%にならない場合がある。
- ③ 標本誤差は、回答者数と得られた結果の比率によって異なる。各回答の比率における誤差（95%は信頼できる誤差の範囲）は下表の通りである。

回答数(N) \	5% 又は 95%	10% 又は 90%	15% 又は 85%	20% 又は 80%	25% 又は 75%	30% 又は 70%	35% 又は 65%	40% 又は 60%	45% 又は 55%	50%
N=800	±1.5%	±2.1%	±2.5%	±2.8%	±3.0%	±3.2%	±3.3%	±3.4%	±3.4%	±3.5%
N=500	±1.9%	±2.6%	±3.1%	±3.5%	±3.8%	±4.0%	±4.2%	±4.3%	±4.4%	±4.4%
N=300	±2.5%	±3.4%	±4.0%	±4.5%	±4.9%	±5.2%	±5.4%	±5.5%	±5.6%	±5.7%
N=100	±4.3%	±5.9%	±7.0%	±7.8%	±8.5%	±9.0%	±9.3%	±9.6%	±9.7%	±9.8%
N=50	±6.0%	±8.3%	±9.9%	±11.1%	±12.0%	±12.7%	±13.2%	±13.6%	±13.8%	±13.9%

※回答数800、そのうち30%（=回答の比率）が回答した場合、この回答に対する誤差は±3.2%である。

- ④ 統計的検定結果については、5%水準に*印を、1%水準に**印を、それぞれ付記した。
- ⑤ 自由回答の集計については、内容ごとに分類し集計した。

3) 回答者の属性

【性別】 男性（41.1%）、女性（57.4%）、無回答（1.5%）

【年齢】 60歳以上（18.2%）、40～44歳（14.3%）、45～49歳（12.7%）

【就業状況】 常勤（41.1%）、非常勤（21.9%）、主婦・主夫（21.9%）、無職・その他（7.6%）

【子育て経験】 子育て経験あり（66.9%）、子育て経験なし（31.9%）

【居住地区】 南地区（34.1%）、鶴川地区（23.0%）、町田地区（19.4%）、忠生地区（13.9%）、堺地区（7.5%）

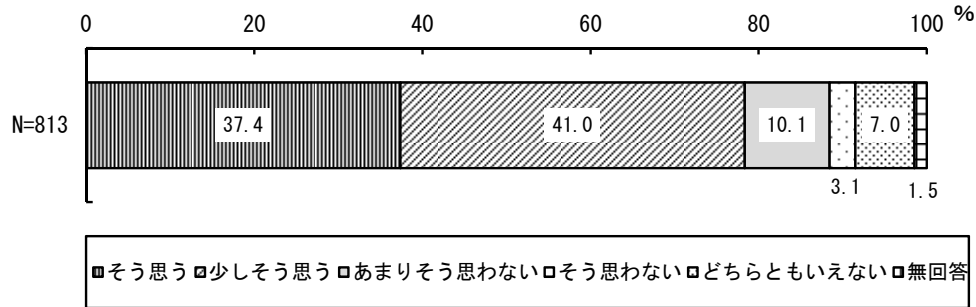
4) 調査結果

(1) 「ひきこもり」に対する市民の理解や意識について

①若者の自立に対する考え、就労に対する考えの認識

○「自立していない若者が増えている」と感じている市民は78.4%であった。

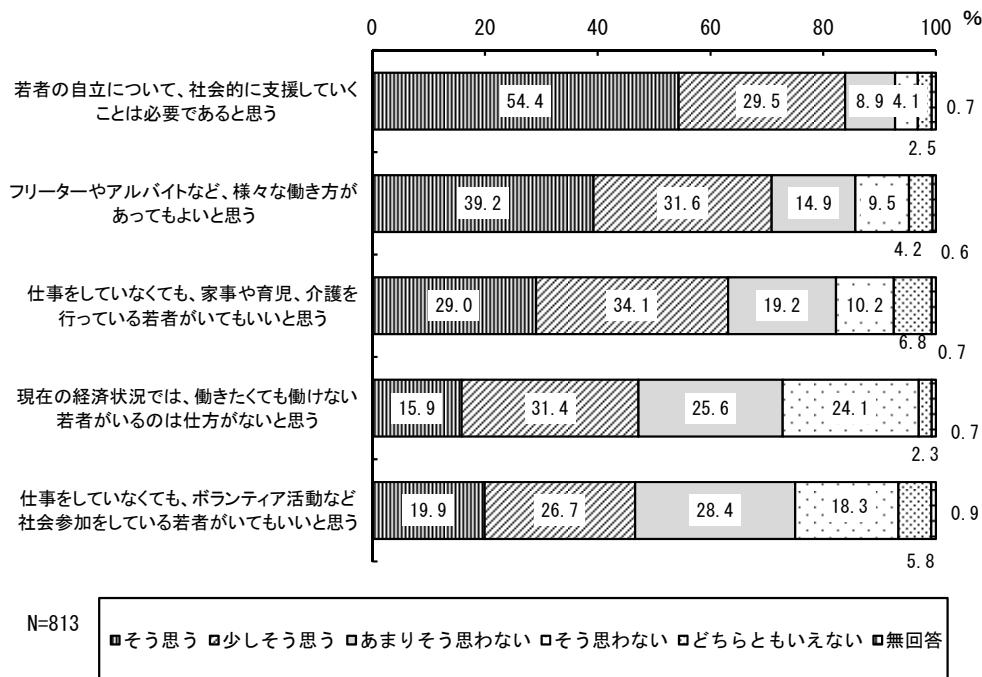
「自立していない若者が増えている」ことに対する考え



○フリーターやアルバイトなど多様な働き方を肯定している市民は70.8%であった。

○「若者の自立に向けた社会的支援は必要」と考えている市民は83.9%であった。

若者の就労や社会参加についての考え

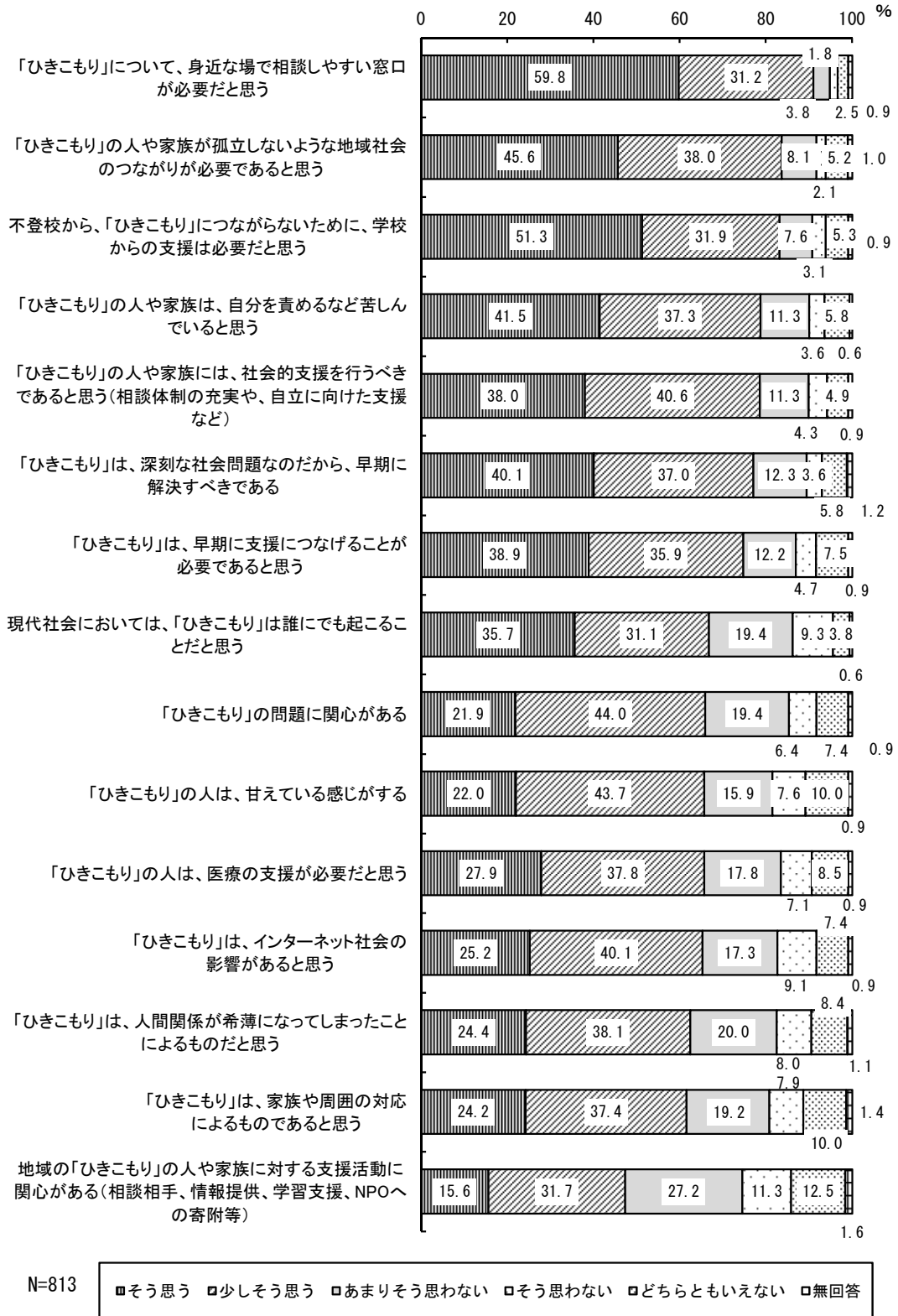


②「ひきこもり」の背景、社会的支援等についての認識

○「ひきこもりについて、身近な場で相談しやすい窓口が必要である」について、91.0%が肯定している。また「ひきこもりの人や家族が孤立しないような地域社会のつながりが必要である」については83.6%、「不登校からひきこもりにつながらないための、学校からの支援の必要性」については83.2%が肯定している。

○「地域でのひきこもりの人や家族に対する支援活動」については、47.3%が関心を持っている。

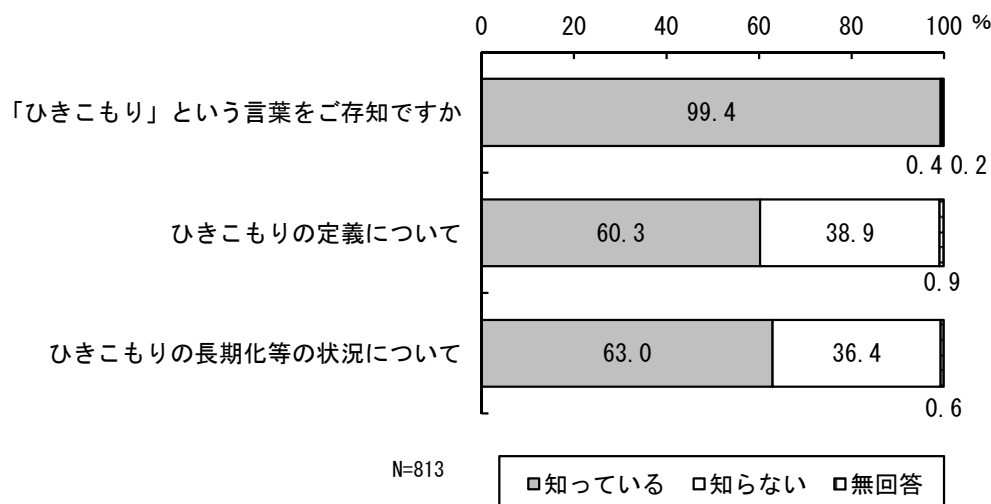
「ひきこもり」の背景、「ひきこもり」に対する考え、社会的支援等について



③「ひきこもり」の認知について

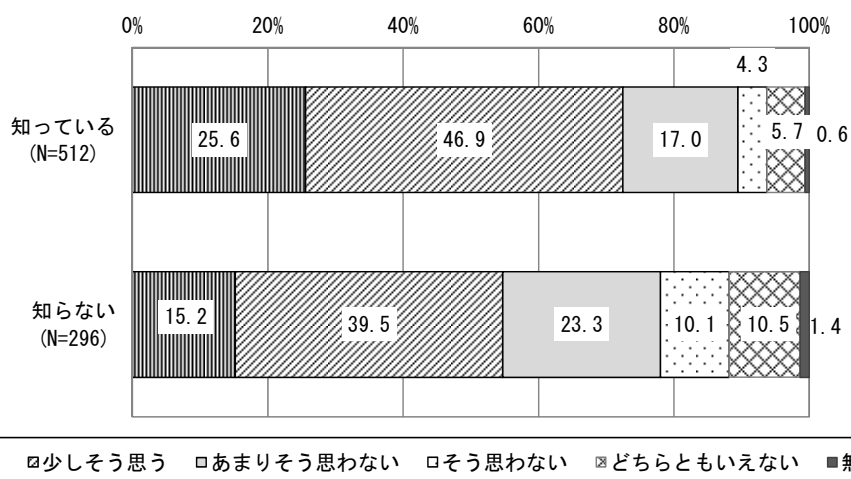
○「ひきこもり」という言葉についてはほぼ全員が認知しており、ひきこもりの定義については60.3%、ひきこもりの長期化等の状況については63.0%が認知している。

ひきこもりの状況の認知



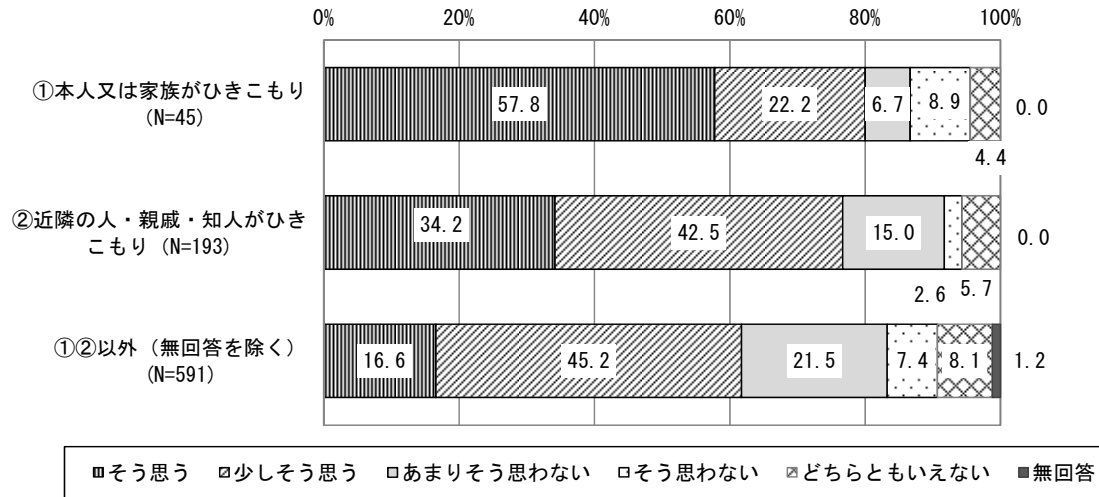
○ひきこもりの状況を知っている人は、知らない人と比べてひきこもりの問題への関心が高い。

ひきこもりの状況の認知の有無別にみた「ひきこもり」の問題への関心



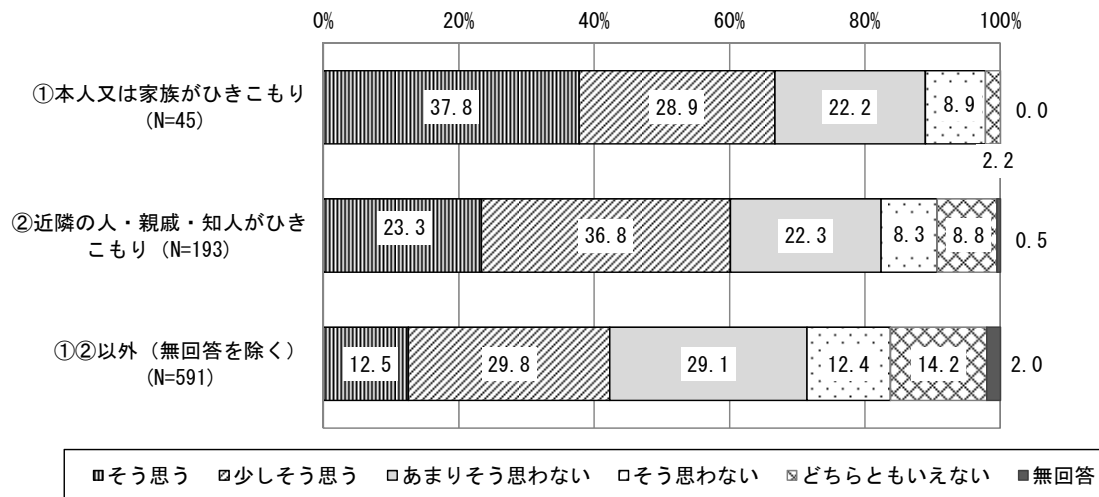
○本人又は家族、近隣の人・親戚・知人にひきこもりの人がいる人では、そうでない人と比べて「ひきこもり」の問題への関心が高い。特に本人又は家族がひきこもりの人では、「そう思う」が57.8%となっている。

ひきこもりの身近さ別にみた「ひきこもり」の問題への関心



○本人や家族・身の周りにひきこもりの状況の人がいる人の方が、地域のひきこもりの人や家族に対する支援活動への関心が高い。

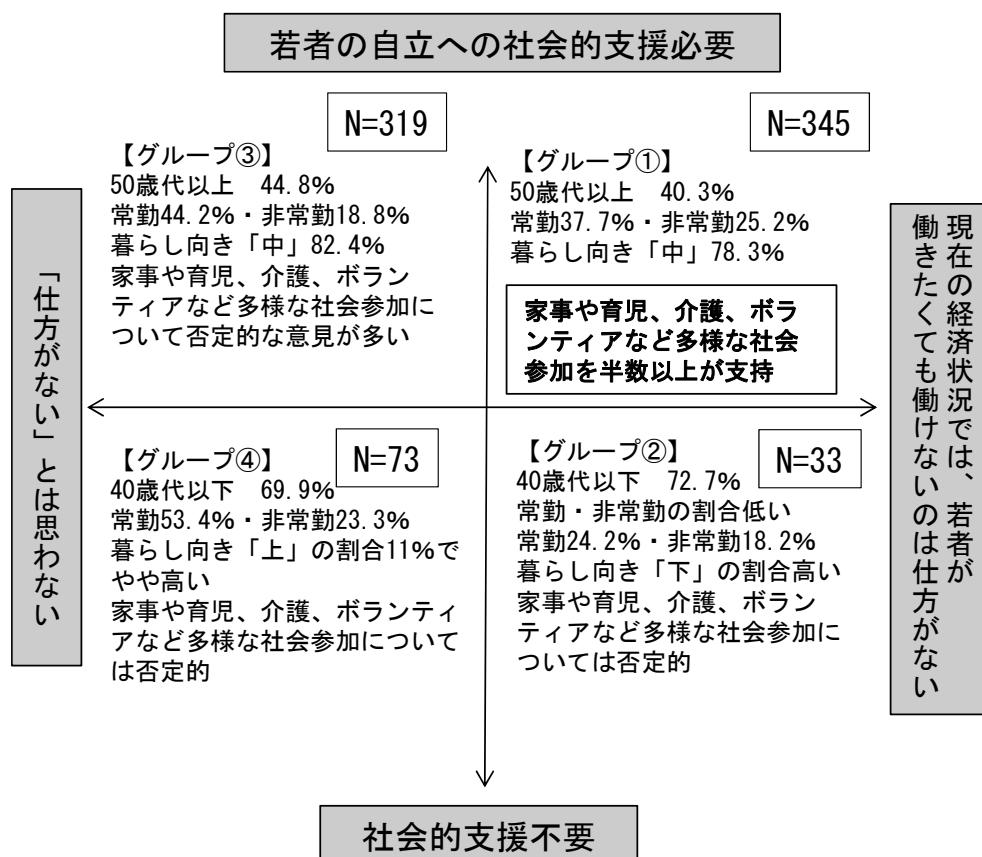
ひきこもりの身近さ別にみた 支援活動への関心



④若者の自立に対する社会的支援についての考え

○若者の自立に対する社会的支援を支持しているグループは50歳以上の割合が高く、40歳代以下では社会的支援への支持が低く、多様な社会参加についても否定的であることがうかがえた。また「現在の経済状況では、若者が働きたくても働けないのは仕方がないとは思わない」という考えを示しているグループは、常勤で働いており暮らし向きが高い傾向がみられた。

若者の自立に対する社会的支援についての考え



○若者を取り巻く環境の認識と、若者の自立支援に対する考えの関連性をみるために、問4(1)「現在の経済状況では、働きたくても働けない若者がいるのは仕方がないと思う」と(5)「若者の自立について、社会的に支援していくことは必要であると思う」への回答状況をもとに、回答者813名を下記の4つのグループに分類した。

グループ①：社会環境要因、社会的支援の必要性をともに支持しているグループ

グループ②：社会環境要因は肯定しつつも社会的支援は不要とするグループ

グループ③：社会環境要因は否定しつつも何らかの社会的支援は必要とするグループ

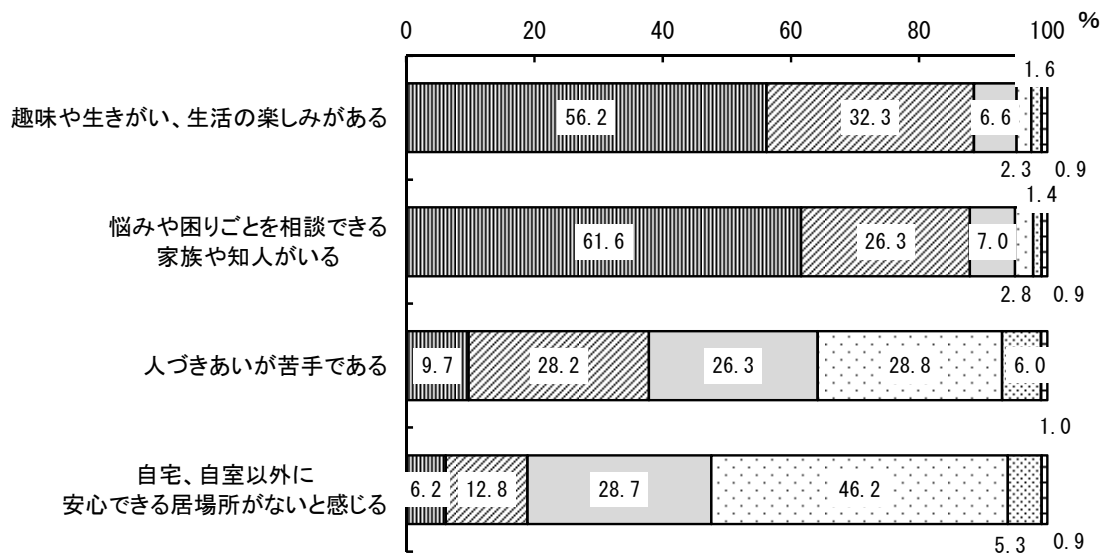
グループ④：社会環境要因も社会的支援も否定しているグループ

(2) 当事者を取り巻いている環境について

①回答者（市民）の状況

○「趣味や生きがい、生活の楽しみがある」については56.2%、「悩みや困りごとを相談できる家族や知人がいる」については61.6%が「あてはまる」と回答、「人づきあいが苦手である」については37.9%が「あてはまる」「少しあてはまる」と回答、「自宅、自室以外に安心できる居場所がないと感じる」については、19.0%が「あてはまる」「少しあてはまる」と回答している。

回答者自身の状況

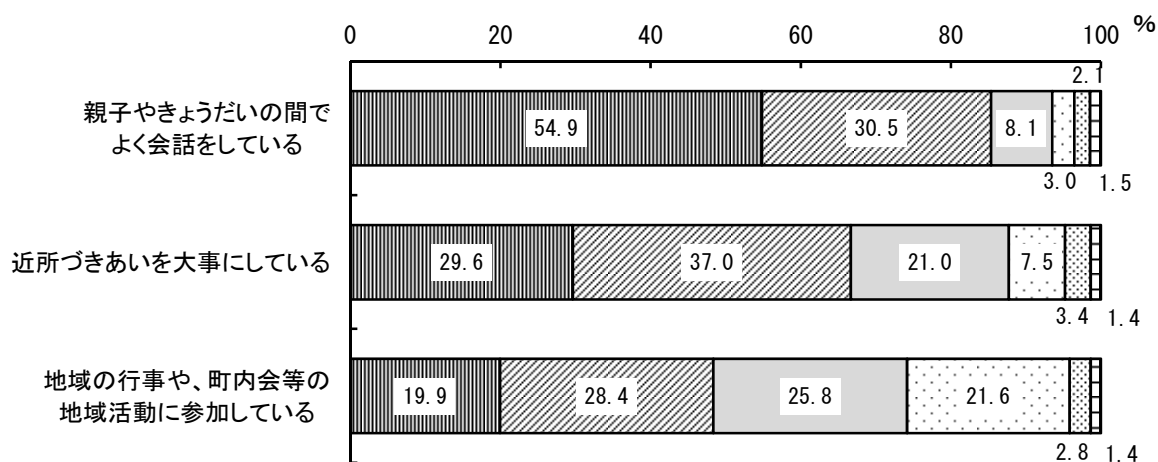


N=813 □あてはまる □少しあてはまる □あまりあてはまらない □あてはまらない □どちらともいえない □無回答

②回答者（市民）の家族の状況

○「親子やきょうだい間でよく会話をしている」については54.9%、「近所づきあいを大切にしている」については29.6%、「地域の行事や町内会等の地域活動への参加」については19.9%が「あてはまる」と回答している。

回答者の家族の状況



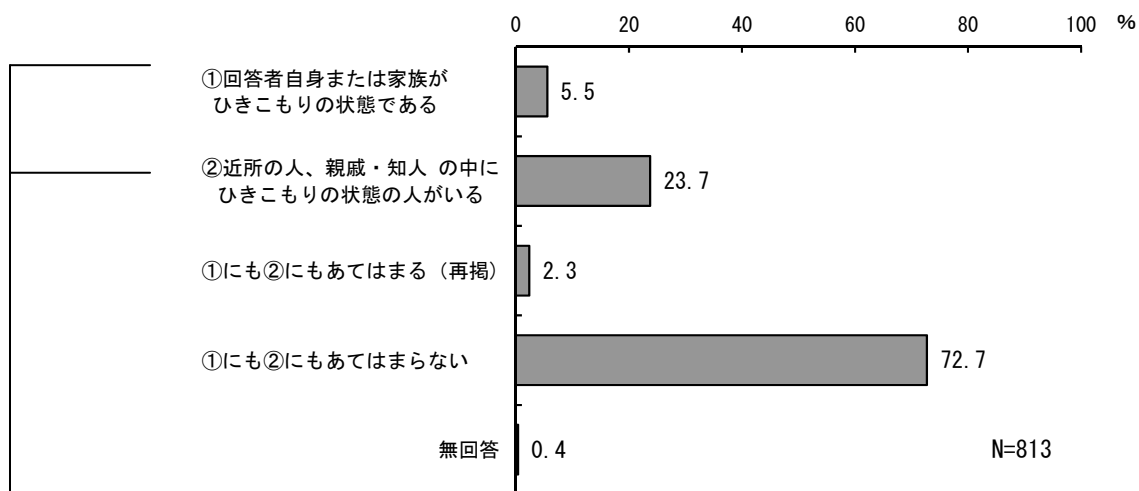
N=813

■あてはまる □少しあてはまる □あまりあてはまらない □あてはまらない □どちらともいえない □無回答

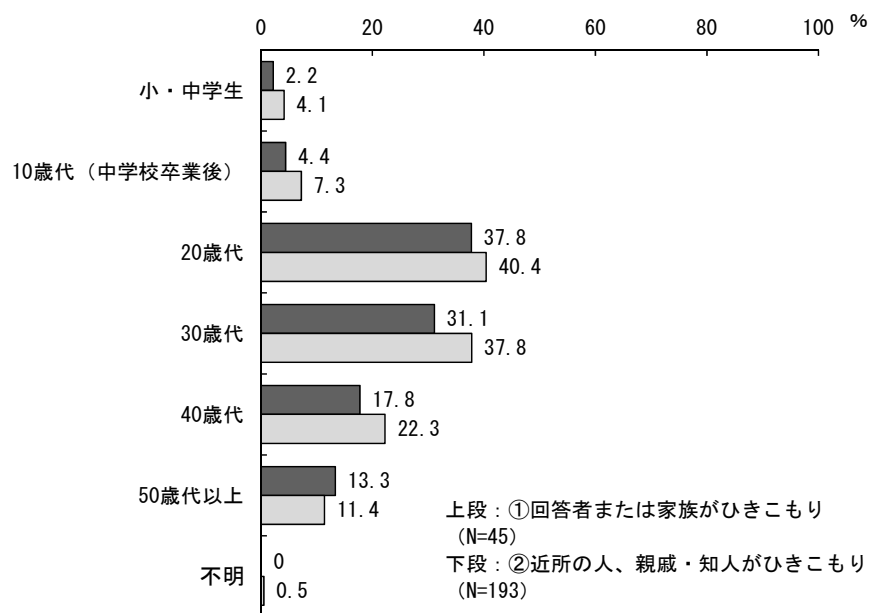
③ひきこもりの状況

○回答者自身または家族がひきこもりの状態であると回答した人は5.5%（45名）、年齢は20歳代、30歳代が68.9%であった。
 ○近所の人、親戚・知人の中にひきこもりの状態の人がいると回答した人は23.7%であった。

回答者の周辺におけるひきこもりの方の有無



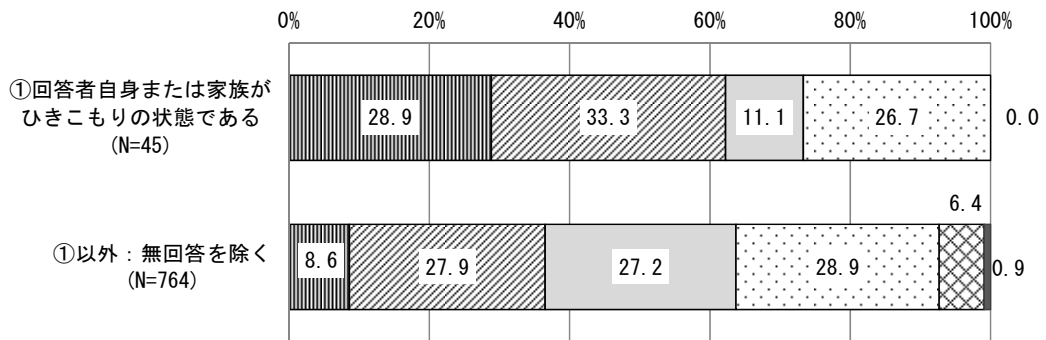
- ① 回答者自身または家族がひきこもりの状態（45名）・当事者の年齢
 ② 近所の人、親戚・知人がひきこもりの状態（193名）・当事者の年齢



(複数回答)

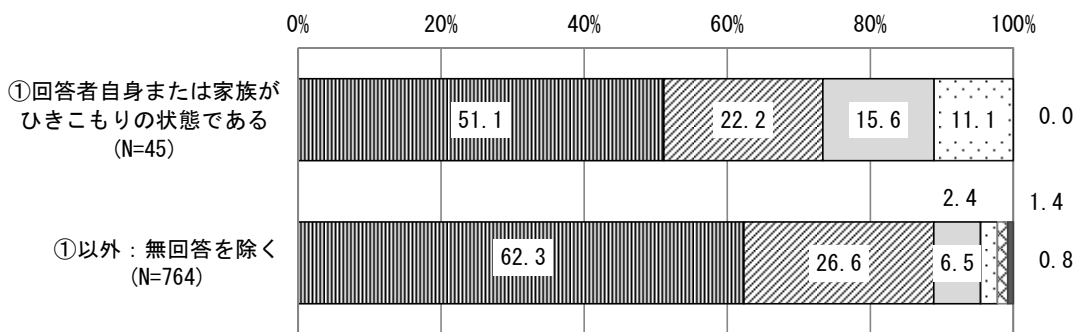
○「回答者自身または家族がひきこもりの状態である」人では、人づきあいに苦手さを感じている人が 62.2%、悩みや困りごとを相談できる家族・友人がいない人が 26.7%、自宅・自室以外に安心できる居場所がないと感じている人が 35.5%である。

「人づきあいが苦手である」の回答状況



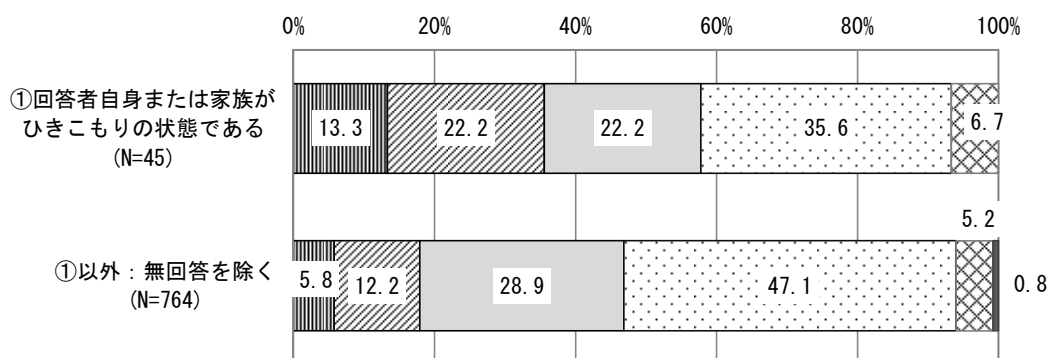
■あてはまる □少しあてはまる □あまりあてはまらない □あてはまらない □どちらともいえない ■無回答

「悩みや困りごとを相談できる家族や知人がいる」の回答状況



■あてはまる □少しあてはまる □あまりあてはまらない □あてはまらない □どちらともいえない ■無回答

「自宅、自室以外に安心できる居場所がないと感じる」の回答状況

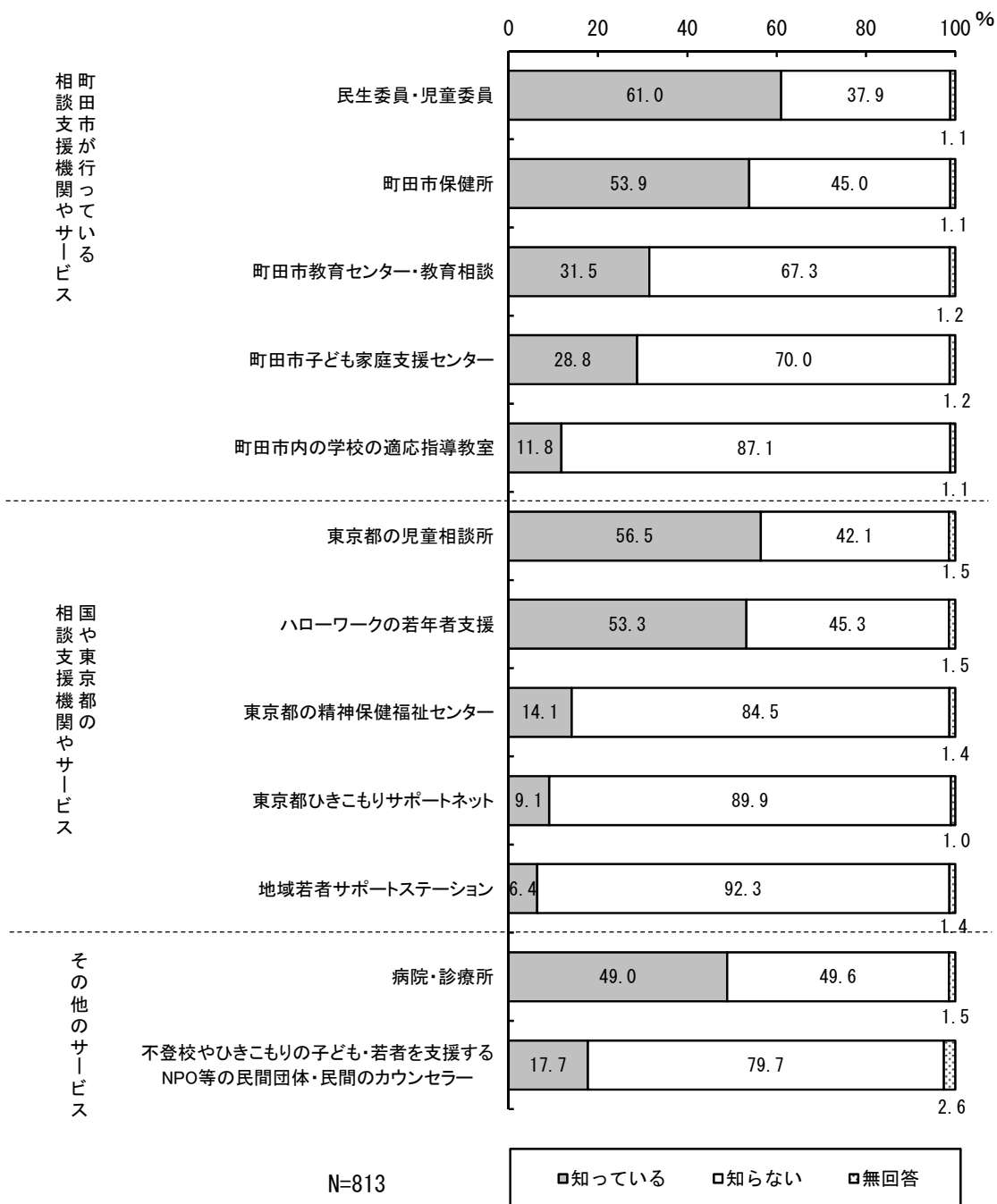


■あてはまる □少しあてはまる □あまりあてはまらない □あてはまらない □どちらともいえない ■無回答

(3) ひきこもり者の社会復帰を支援する社会資源（支援機関）について

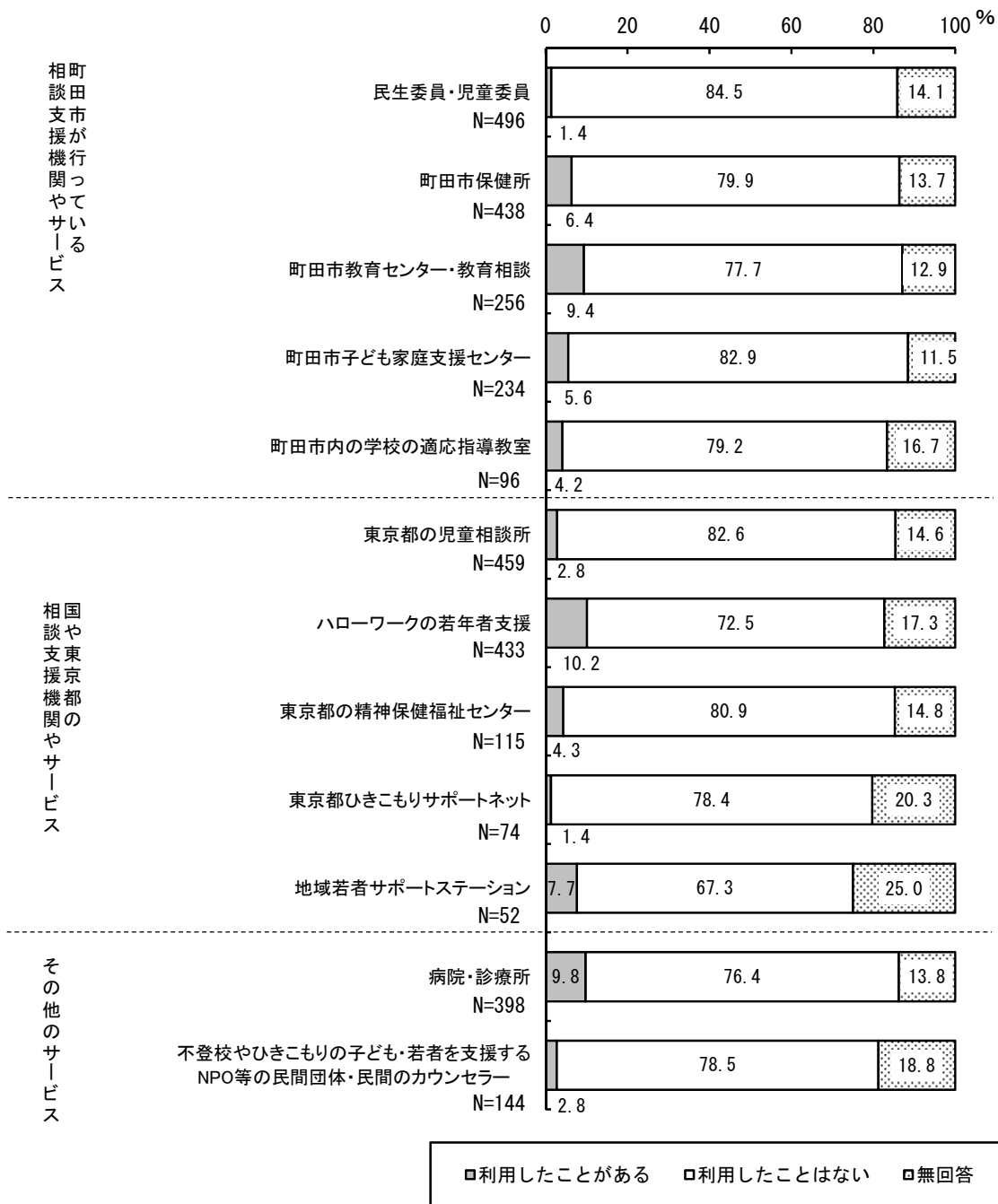
○認知度が概ね半数を超えているサービスや機関は「民生委員・児童委員」「児童相談所」「保健所」「ハローワークの若年者支援」「病院・診療所」である。

「ひきこもり」に関する社会資源の認知



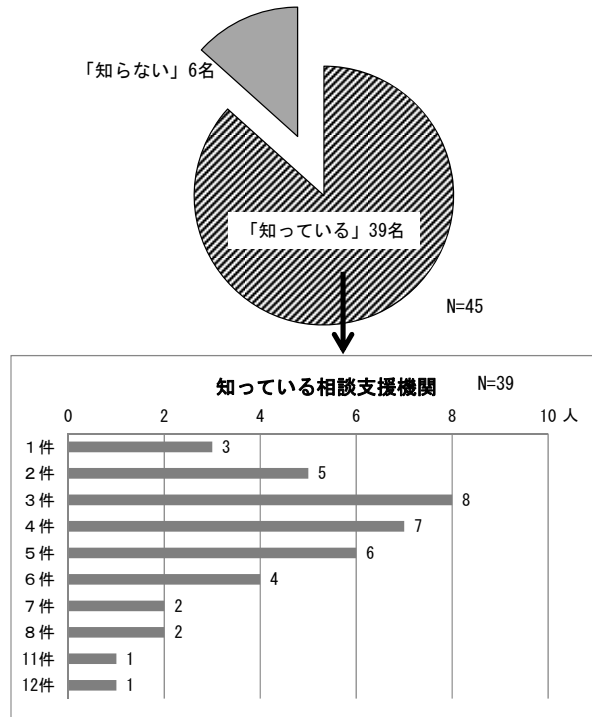
○実際にサービスを利用したという人は、回答者全体で見ると少ないが、12項目中最も多かったのは「ハローワークの若年者支援」で44名であった。これは、「ハローワークの若年者支援」を「知っている」と回答した人433名の10.2%にあたる。次いで「病院・診療所」(39名)、「町田市保健所」(28名)、「町田市教育センター・教育相談」(24名)となっている。

「ひきこもり」に関する相談支援機関やサービスについて（利用経験）

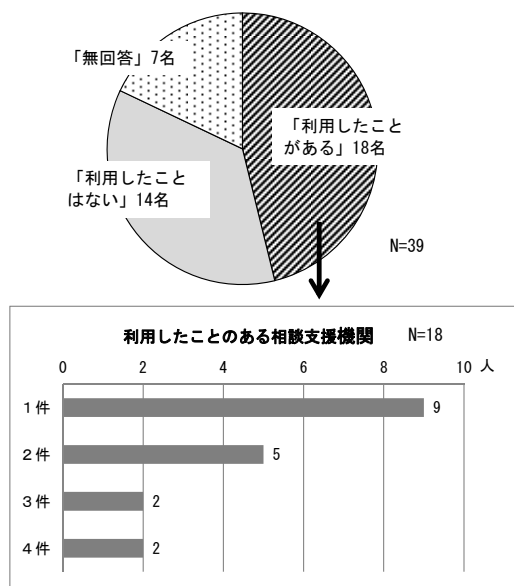


- 本人または家族がひきこもりの状況の45名のうち1件も支援機関やサービスを知らない人は6名であった。
- 相談支援機関やサービスを知っている39名のうち、「利用したことがある」人は18名であった。

本人または家族がひきこもりの状況の人（45名）の相談支援機関やサービスの認知状況



本人または家族がひきこもりの状況の人（45名）の相談支援機関やサービスの利用状況
（相談支援機関やサービスを認知している人39名の内訳）

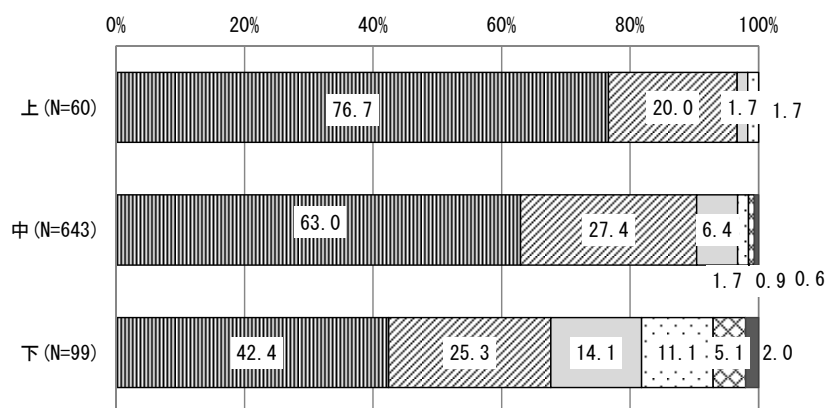


(4)「ひきこもり」の問題以外の状況

①暮らし向き別にみた状況

○「悩みや困りごとを相談できる家族や知人がいる」について、「上」と感じている人では「あてはまる」「少しあてはまる」の割合が高く、「中」「下」となるほどその割合は低くなっている。

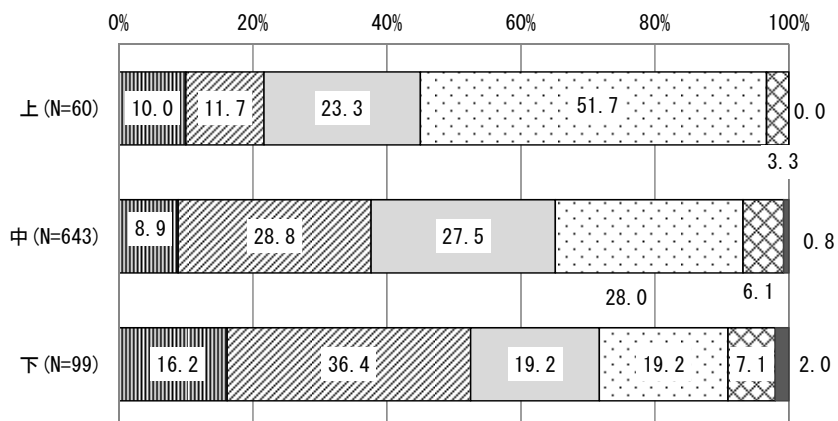
暮らし向き別にみた 回答者自身の状況について
— 悩みや困りごとを相談できる家族や知人がいる —



■あてはまる □少しあてはまる □あまりあてはまらない □あてはまらない □どちらともいえない ■無回答

○「自宅・自室以外に安心できる居場所がないと感じる」について、「下」と回答した人では「あてはまる」または「少しあてはまる」の割合が高く、「中」、「上」となるほどその割合は低くなっている。

暮らし向き別にみた 回答者自身の状況について
— 自宅、自室以外に安心できる居場所がないと感じる —

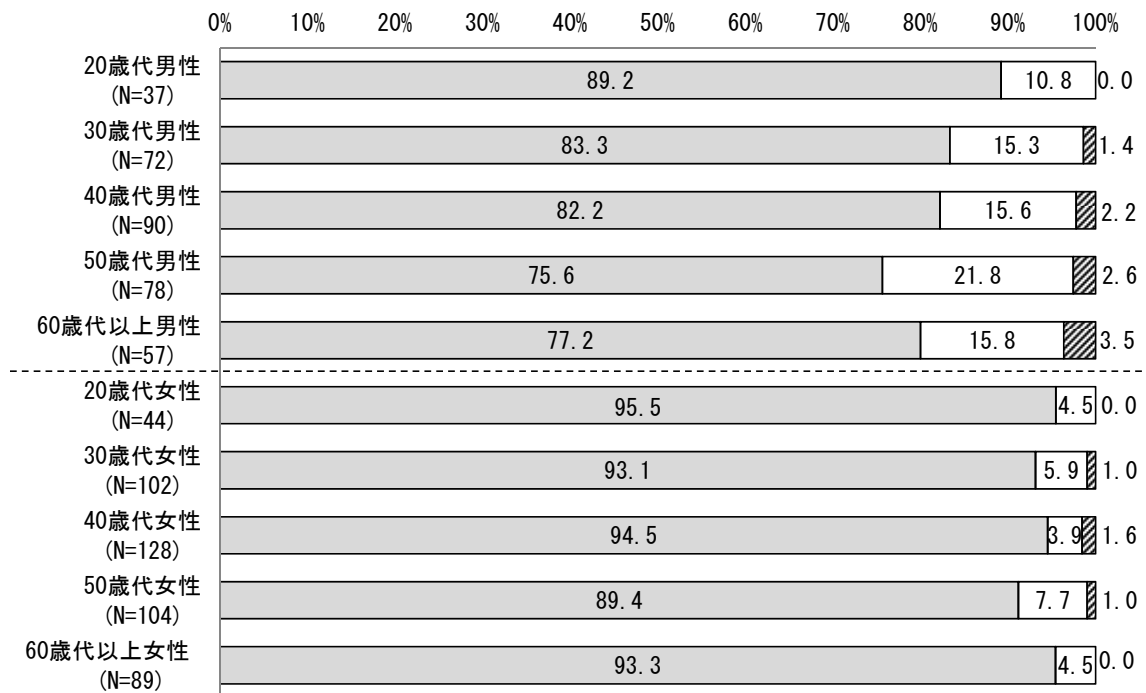


■あてはまる □少しあてはまる □あまりあてはまらない □あてはまらない □どちらともいえない ■無回答

②年齢別にみた状況

○50歳代男性では「相談できる家族や知人がいない」人の割合が他と比べて高い。

「悩みや困りごとを相談できる家族や知人がいる」の回答状況



○あてはまる+少しあてはまる □あまりあてはまらない+あてはまらない ▨どちらともいえない

**5%有意

2 若年者の自立に関する調査（民生委員・児童委員調査）

1) 調査概要

【調査対象及び回収の状況】

調査対象者 町田市内の民生委員、主任児童委員 244名

回収件数 156件（有効回収率 63.9%）

【調査方法】9地区の定例民生委員児童委員協議会で直接配布、郵送による回収

【調査期間】2012年10月

2) 調査結果の見方

- ① 設問の回答者数はNで表示している。
- ② 集計は、小数第2位を四捨五入しているため、数値の合計が100%にならない場合がある。
- ③ 標本誤差は、回答者数と得られた結果の比率によって異なるが、回答者数（N）=156とする場合の誤差（95%は信頼できる誤差の範囲）は下記の通りである。

各回答の比率	5% 又は 95%	10% 又は 90%	15% 又は 85%	20% 又は 80%	25% 又は 75%	30% 又は 70%	35% 又は 65%	40% 又は 60%	45% 又は 55%	50%
標本誤差	±1.24%	±1.70%	±2.03%	±2.27%	±2.46%	±2.60%	±2.71%	±2.78%	±2.83%	±2.84%

- ④ 統計的検定結果については、5%水準に*印を、1%水準に**印を、それぞれ付記した。
- ⑤ 自由回答の集計については、内容ごとに分類し集計した。

3) 回答者の属性

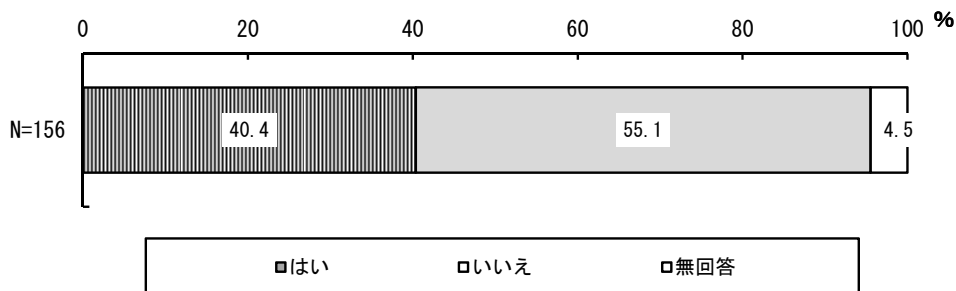
【民政委員・児童委員歴】平均6.5年

4) 調査結果

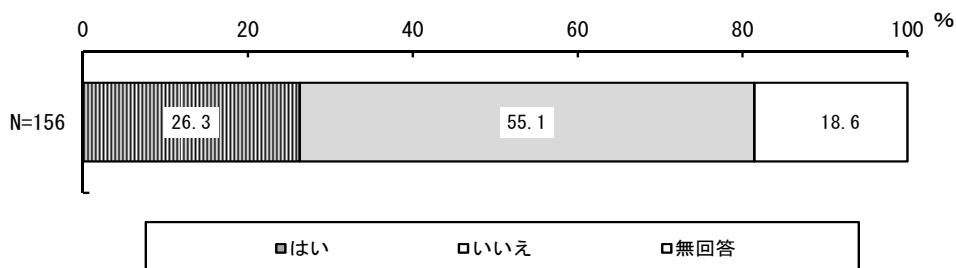
○担当地区内にひきこもり傾向にある人がいると回答した人は 40.4%、相談や情報提供を受けたことがあると回答した人は 26.3%であった。

○相談を受ける上で、困ったこと、課題と感じたこととしては「対応方法がわからない」、「こちらからの働きかけを拒否、無視される」等である。

相談や情報提供は受けていないが、
担当地区に「ひきこもり」の傾向にあると思われる方がいる



「ひきこもり」又は、「ひきこもり」の傾向にある方に関する、
相談・情報提供を受けたことがある



○相談・情報提供を受けた後の対応については、「その他」が最も多く 18 件、次いで「訪問や電話相談を行った（行っている）」（15 件）、「行政機関、専門機関に相談した」（14 件）が多い。

相談を受けた後の対応（複数回答）

	件数	割合 N=41	割合 (除無回答) N=41
訪問や電話相談を行った（行っている）	15	36.6	36.6
行政機関、専門機関に相談した	14	34.1	34.1
他の民生委員・児童委員に相談した	8	19.5	19.5
自治会・町内会の役員に相談した	2	4.9	4.9
その他	18	43.9	43.9
無回答	0	0.0	—
全 体	57	—	—

相談を受けた後の対応：「その他」の内容

内 容	(件)
見守っている	6
家族と話をしている、家族への情報提供	5
本人から話を聞いている、本人への情報提供	2
今後訪問予定	1
交番との打ち合わせ	1
対応していないが対応困難	1
訪問しているが応答がない	1
合 計	17

○相談を受ける上で、困ったこと、課題と感じたこととして最も多かったのは「対応方法がわからない」、「こちらからの働きかけを拒否、無視される」という意見であった。また「見守ってくださいと言われたが、具体的にどのようにしたらよいかわからない」、「精神疾患の方への接し方がわからない」など、全体として当事者や家族との関わり方について課題と感じている状況がうかがえる。

相談を受ける上で、困ったこと、課題と感じたこと（自由回答）

内 容	(件)
対応方法が分からない	5
こちらからの働きかけを拒否、無視される	5
見守りの場合、対応が難しい	4
精神疾患の方への接し方がわからない	3
近隣住民が困っている（騒音等）	3
家族が隠したがる	2
本人・家族の態度（問題とっていない）	2
個人情報の取り扱い	2
その他	5
合 計	31

○一般市民調査と比較すると、全体的にひきこもりの問題への関心が高く、支援の必要性、早期解決の必要性について、一般市民よりも高い割合で支持している傾向がみられる。また「地域のひきこもりの人や家族に対する支援活動」について、一般市民よりも関心や活動意欲が高くなっている。

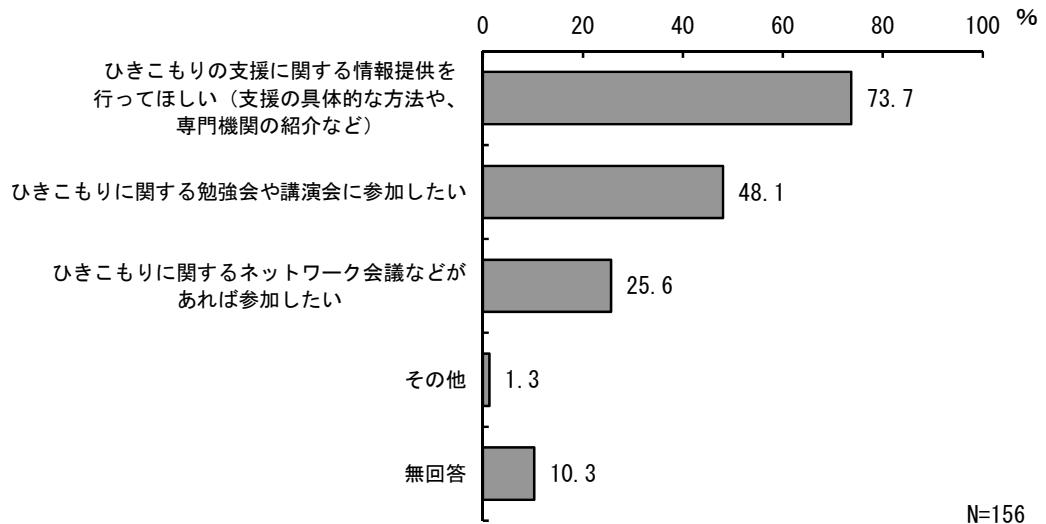
「ひきこもり」の背景、「ひきこもり」に対する考え、社会的支援等について

	民生委員調査 (N=156)			一般市民調査 (N=813)		
	そう思う +少しそ う思う	そう思わ ない+あ まりそう 思わない	どちらと もいえな い	そう思う +少しそ う思う	そう思わ ない+あ まりそう 思わない	どちらと もいえな い
「ひきこもり」の問題に関心がある	86.5	7.1	4.5	65.9	25.8	7.4
「ひきこもり」は、深刻な社会問題なのだから、早期に解決すべきである	79.5	12.2	6.4	77.1	15.9	5.8
「ひきこもり」は、家族や周囲の対応によるものであると思う	56.4	27.6	11.5	61.6	27.1	10.0
「ひきこもり」は、人間関係が希薄になってしまったことによるものだと思う	57.7	28.8	10.9	62.5	28.0	8.4
「ひきこもり」は、インターネット社会の影響があると思う	52.6	34.0	11.5	65.3	26.4	7.4
現代社会においては、「ひきこもり」は誰にでも起こることだと思う	64.7	26.3	6.4	66.8	28.8	3.8
「ひきこもり」の人や家族は、自分を責めるなど苦しんでいると思う	82.1	10.3	3.2	78.7	14.9	5.8
「ひきこもり」の人は、甘えている感じがする	42.3	40.4	14.1	65.7	23.5	10.0
「ひきこもり」の人や家族には、社会的支援を行うべきであると思う	87.2	5.1	4.5	78.6	15.6	4.9
「ひきこもり」の人は、医療の支援が必要だと思う	78.8	10.3	8.3	65.7	25.0	8.5
「ひきこもり」は、早期に支援につなげることが必要であると思う	82.1	9.6	5.8	74.8	16.9	7.5
不登校から、「ひきこもり」につながらないために、学校からの支援は必要だと思う	90.4	4.5	3.2	83.2	10.7	5.3
「ひきこもり」の人や家族が孤立しないような地域社会のつながりが必要であると思う	89.7	3.8	3.2	83.6	10.2	5.2
「ひきこもり」について、身近な場で相談しやすい窓口が必要だと思う	91.7	2.6	2.6	91.0	5.7	2.5
地域の「ひきこもり」の人や家族に対する支援活動に関心がある	73.1	13.5	9.6	47.4	38.5	12.5
ひきこもりの方やご家族への支援について、今後積極的に関わっていききたいと思う	67.3	16.0	13.5	—	—	—

※網掛け部分は、「そう思う+少しそう思う」の割合が高い方を示す
**1%有意

○「ひきこもりの支援に関する情報提供を行ってほしい」(73.7%)、「ひきこもりに関する勉強会や講演会に参加したい」(48.1%)、「ひきこもりに関するネットワーク会議などがあれば参加したい」(25.6%)であった。

ひきこもりの方やご家族への支援に関して、行政に期待すること（複数回答）



3 社会資源調査（精神保健・医療分野）

1) 調査概要

【目的】

「ひきこもり」などの状態にある若者の相談支援の充実を図るため、

- ①医療機関へ訪問調査を行い、児童思春期に係わる診療状況の実態把握をする
- ②地域の支援関係者と、顔の見えるネットワークを構築する

【調査対象及び協力状況】

調査対象医療機関 36ヶ所

調査協力医療機関 全36ヶ所

※P.119 社会資源調査（精神保健・医療分野）機関一覧 参照

- ① 市内病院（精神科外来を含む）9ヶ所、市内診療所（精神科、心療内科）20ヶ所
- ② 町田市近郊の児童思春期に対応している病院（精神科）7ヶ所

【調査方法】 郵送にて調査票を配布後、保健師2名体制で訪問し聞き取り調査を実施

※聞き取り調査は、医療機関の院長又は医療連携室担当者等を対象に実施した。

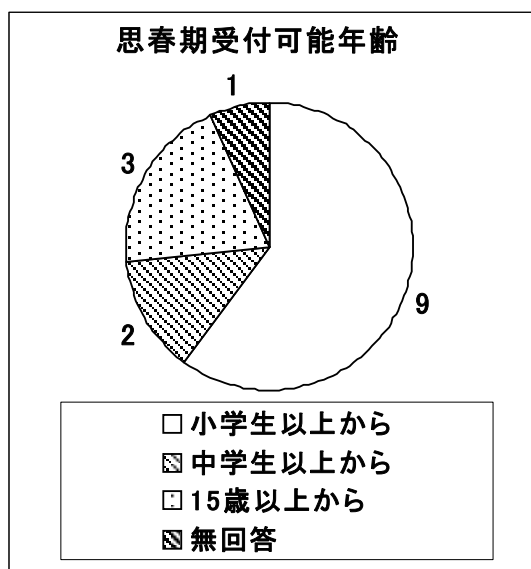
【調査期間】 2012年7月～9月

2) 調査結果

【町田市内における児童思春期に係わる診療状況】

市内医療機関29ヶ所のうち、児童思春期に対応可能と回答した医療機関は15ヶ所であった。そのうち、診療内容でカウンセリング及び心理検査実施機関は6ヶ所であった。以下は、市内の児童思春期に対応可能と回答した医療機関15ヶ所の傾向についての結果である。

- ① 受付可能年齢：小学生以上 9ヶ所、中学生以上 2ヶ所、15歳以上 3ヶ所であった。

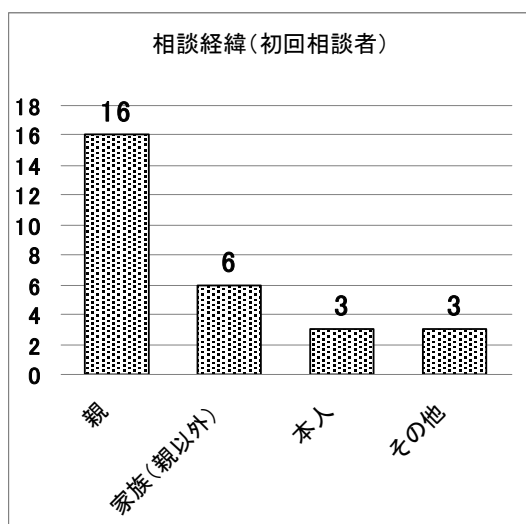


思春期受け付け可能年齢	
小学生以上から	9
中学生以上から	2
15歳以上から	3
無回答	1
総計	15

- ② 紹介元：学校 8ヶ所、教育センター 4ヶ所、その他として、家族、児童相談所、保健所、口コミであった。(複数回答)

紹介元	
学校	8
教育相談センター	4
その他	6
○その他の内訳： 家族、児童相談所、保健所、口コミ	

- ③ 相談の経緯（初回相談者）：親 16件、家族（親以外）6件、本人 3件であった。(複数回答)

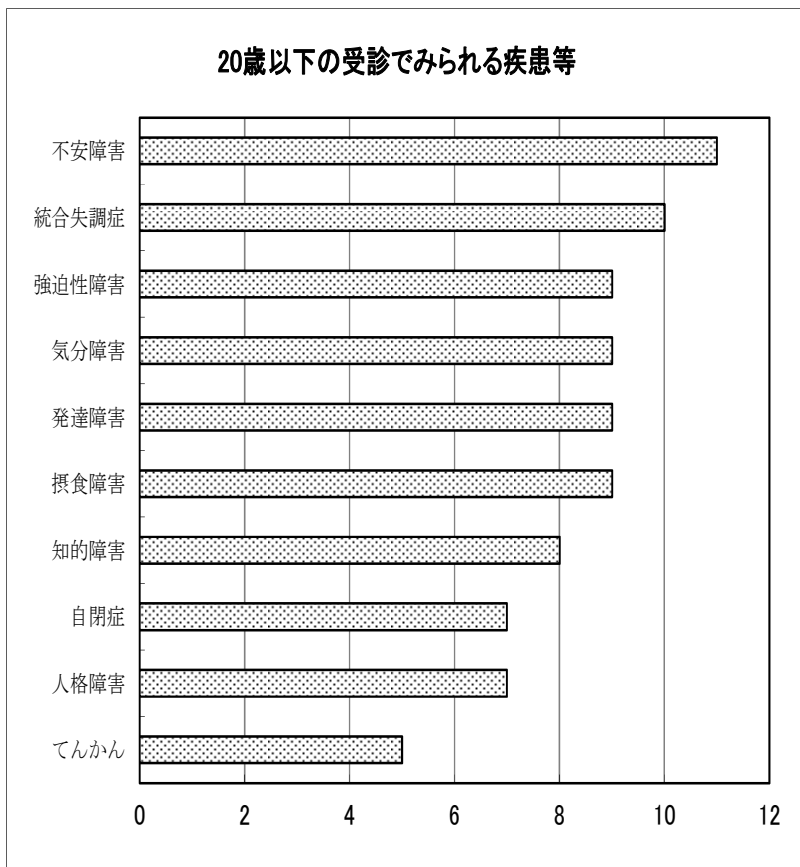


相談の経緯（初回相談者）	
親	16
家族（親以外）	6
本人	3
その他	3

- ④ 主訴：自傷行為、自殺企図、うつ、暴力、多動、不適応、不登校、頭痛、腹痛、適応障害、ひきこもり等であった。(複数回答)

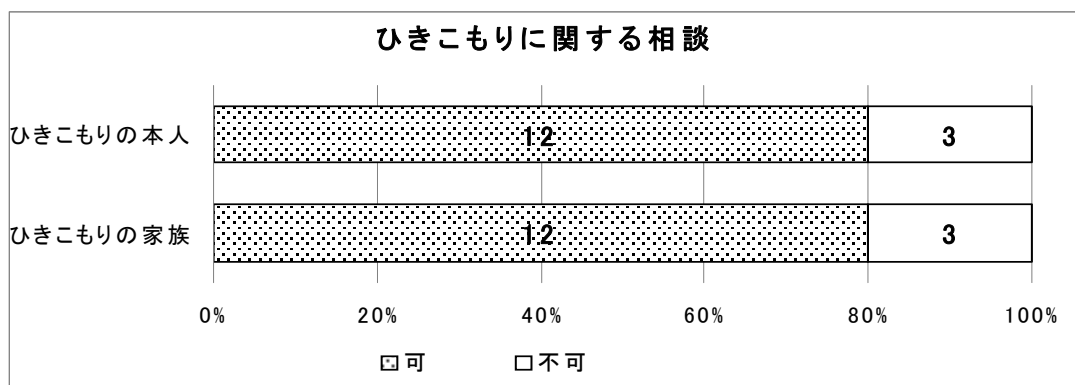
主訴	
自傷行為	4
自殺企図	1
○その他：うつ、暴力、多動、ひきこもり、適応障害、不適応、不登校、頭痛、腹痛等	

- ⑤ 20歳以下でみられる主な疾患：不安障害、強迫性障害、統合失調症、摂食障害、発達障害、気分障害等であった。その他の疾患等として、いじめ、不登校、パニック障害、新型うつが挙げられた。（複数回答）



20歳以下の受診でみられる疾患等	
不安障害	11
統合失調症	10
強迫性障害	9
気分障害	9
発達障害	9
摂食障害	9
知的障害	8
自閉症	7
人格障害	7
てんかん	5
○その他の内訳：パニック障害、新型うつ、いじめ、不登校	

- ⑥ ひきこもりの相談を受けることが可能と回答した医療機関、家族相談が可能と回答した医療機関はそれぞれ12ヶ所であった。



ひきこもりに関する相談	可	不可
ひきこもりの本人	12	3
ひきこもりの家族	12	3

- ⑦ 保健所へ期待すること：入院支援や退院後のフォロー、家族支援などの個別支援活動の他、地域との連携強化や、疾患についての普及啓発、社会資源情報の発信、社会復帰の場の提供、精神保健における医療連携の中心的な役割を担ってほしい等の意見が聞かれた。

保健所に期待すること、要望
<ul style="list-style-type: none">・地域と積極的に連携したい。・地域生活を送る上でのフォローをお願いしたい。・障がい福祉課と保健所の役割分担がわかりにくい。・病気の理解等の啓発が大切。・精神保健における医療連携の中心的な役割を担ってもらいたい。・患者にあれやこれやとプレッシャーをかけないでほしい。・ひきこもりの病態を理解して訪問してほしい。・療育、未就学の人々の社会資源を知りたい。・ひきこもりの方が利用できる居場所や、デイケア、活動の場などを提供してほしい。・診療所だけでは解決が困難な場合、行政は協力してほしい。・病識の無い人の受診に向けた支援をしてほしい。